

「流れる」に ついて

小 島 和 恵

しかし、それだけでは才覚縦横のことばにはならない。「気働き」を要求し、「結構なもの」を尊んだ父翁である。自身のことばはしみじみと温く、声色面白きこと無類に、あるときは、金の無心法に及び、怒りを発すれば東京風の毒舌でたたみかけた。要求されるところが並みでなかったと想像される。

作者の耳はことばに疎かではない。「流れる」の梨花は、傳屋の挽子の受け答えを「こんなにも若い男が傳屋の挽子で、こんなに丁寧なことばを流れるやうに操る。挽子が女中にこんな滑らかないゝことばで話すのだ。いいことばにはそこはかたない哀しいひびきがある。」「なぜ傳屋の若い衆のいゝことばづかひはかうも懐しいものなんだらう」「誰にといふこともないけれど楽しい人に会ったやうな気がしてゐた」と表現せずにいられない。

「流れる」の世界、くろうとの世界では、ことばを美しく装う。人の心を楽しませる技巧が凝らされる。職業的修練がなされている。動作・顔形の美しさや芸と並び、ことばが人の品を定める重要条件となる。この世界ではだから「誰もが口利き上手」である。目

幸田文氏が受けられたことばの躰はゆるがせのものでなかった。年頭や折々の長上にたいする切口上の挨拶は無論、ゆきとどいて至らぬところなしである。日常の会話の片鱗にも、ことばの芸術に励む家庭の神経がゆきとどいている。露伴翁は「変なことばをつかふと大層いやな顔をされるので、従兄弟たちも、父の前に来てはことばを改めて話す」ほどであり、「ことばが乱れるのは大いに嫌」われたという（ちぎれ雲）。

ことばの乱れは心の乱れを意味する。ことばの技巧の足らなさがうとまれたのではない。「おとうと」の不良化をことばの乱れで知った父は「おまへをかきな言ひかたするね。そんな語氣といふものは正道でないものの語氣だよ。ことばはへたでも許されるが、語氣はへたも上手もない。心がそこへ出るのだから嘘のつきやうはない」と適確に見すえる。「一心」の心からいずることばが要求されるのである。

見えの挨拶に行った梨花が主人と応答する。その会話をきいていたある妓は「このひと口利けるわよ。ことばちゃんとしてるもの」と評価する。そして、この妓は、梨花の人物を見たところよきさうだと勧める一人である。確かにしろうとの世界以上に、ことばは意識してつかわれ、きかれ、人物評価の基準として重視されている。

ことばの技術は見事だが、真心を伴わない技巧は、時に醜い心情を露呈する。女一人の契力だけで凌ぐ世界であるから、のっぴきならぬ狡知の具と化すこともある。

作者は、ことばを通して、適確に「流れる」の世界を把握する。

二

次に「流れる」に現われたことばの技術を考察し、作者がことばの技術を通して、どのように対象に迫っているか考えてみたい。

くろうとのことばは、しろうとのことばよりも、適かに陶冶され優れたものに設定されている。どういふ点に優れているのか。

一流芸者の典型としての水野の女将は「芸者が秘書より上手な点は、相手にしゃべらせることができる口まへを持つること」がそれだといふ。秘書は、実務にたけたしろうとの代表として引用されている。事実、梨花は主人に見えの日「どこを方々歩きまはって来たのでもかまはないと云つてくるくせに、話をぐるりと一トまはりさせて、その方々がどこ／＼だか白状させるやうに水を向けてくる」その技術を、「さすがにくろうとはうまいものだ」と感じさせている。

相手に話をしむける技術は、図らずも胸中吐露の快感を味わわせ

るとき、成功といふべきである。話をしむける人物が卑俗で気品に乏しければ、「一心」の美しさを持たねば、その技術は単なる「鎌」となり、「ごまかし」となる。話をしむけた心は見透かされ、そのことばは墮ちる。三流くろうとの懶惰の心は梨花に看破される。米子は「自分の口からは決して医師を呼ぶとは云はず、それとなく主人が云いだすやうにし向けて待っているらしかった。医者のお金が無いならいとはっきり云へばいいのにさうもせず、ごまかしてそちらに会計を転嫁しようとするきたなき」と評される。「一心」も「匂ふやうな美しい心」もたぬからである。

「若いとき好きになつた人はいつまでも忘れませんなあ」に答えて「花で思ひだしてもしたのかね」（菓子）この父翁の誘ひ方は、「なるほど上手」で一流の気品がある。作者は「こんなふうにならぬでない受けかたをして挨拶を誘ふものか」とうなずく。

ひきだすことばを持つほどの人であれば、語ることはが巧みに豊かなのもちろんである。

とくに挨拶の折目正しさは優れている。お座敷の職業的訓練がそうさせるのか、この社会の封建的な因習からか。時には意地とまぎれやすい。一見放縦な社会を貫く一筋の折目目である。染香は、主人親子と悪戯ついた口論の挙句、主家を出るのだが、敷居際へきちんとすわり「長々ありがと存じました。勝代さんのおっしゃる通り、これでお別れにいたします。おねえさんもうぞご機嫌よろしう」と挨拶する。「一分も透かさずすらりと起ちあがって玄関へ。」その姿が、まことに芸者らしく梨花の目をひく。転向芸者元事務員嬢な、子さんも、この社会の人となつては「この大くそつたれでさあ」と酔態で暴言を吐きつつ、それでも主人へ「ただいま」の挨拶

を忘れない。男衆も同様である。米子の別れた夫は、「すばつと手を突いて折目のある挨拶」をし、梨花を滑稽がらせるほどである。挨拶にも、一流は一流の権式がある。水野の女将にはいきなりの電話は失礼に当たり、その家では幼稚園くらいの女の子すら三味線の手ほどきを受け終えると「正しく稽古台のまへへ手をつけて『おっぱさまありがたう』と云ふ。」

挨拶に始まって、お座敷の務めはことばの技術が最も發揮される場である。チャちな二階が話の技術でいかような座敷にもなる。表情、才気が相俟つてなる総合的所産である。鋸山を応待する主人は「花やかに修飾多い話しかた」でおもしろく世間話をきかせる。その主人はふだんと違い「一トかさも二トかさも大きく」拡がったかのようにある。「からだのまはりに虹がかゝつてゐるやうな感じ」であり、艶で上品である。

さらに、くろうとの豊富な経験は、ことばも話題も豊かにし、場に応じた自在な選択を可能にする。水野の女将は「なんどりと構へる」ということばをつかい、ことばのうまみで梨花の心をとらえる。話の内容が秘密を要するときは隠語を用い、ことばじりだけを使った「巧妙な電話」をかけ、向かい合つては「目を利かせる会話術」が発達する。「当面の事実」などという警察方面の特殊なむつきしい用語も、時に応じて用いられる。

すぐれたことばは、機を選んで語られる。ちゃっかりした早い交渉が「そこにゆとりをもたせてふはりとした持ちかけ」でなされる。ふわりと語り、敏速にきかれる。「つうといへばかあの世界」である。長いといわれる女同志の、一流ではない女中同志の話が、錢湯の十分で済み要領を得ている。

ゆきとどいて敏速なことばは、ゆきとどいた心から生まれる。水野の女将は主人の経済的逼迫を知っている。だから「今夜あたしは中途半端などほんだったのでおなかが空いた」といい「さりげなくとりこしらへて、あたゝかいものなどをふるまふ」一流芸妓はふるまいのことばにも、ゆきとどいた心を配る。「ふはり」と自然に、いたわられた人の自尊心を傷つけぬ配慮がなされている。

この心があれば、奥務の電話一本にも「雇傭関係に似たさっぱりとしたサーヴィス精神みたいなもの」は溢れる。「しろうとのはい、奥さまの行きとどきかたよりもう一段すっきりしたものが迫ってくる。」仕事はてきばきと処置される。この社会では噂までが「スピードの早さ」をもっている。噂は職業上の重要事である。

ゆきとどいた心は相手の心を見抜き「人情のつぼ」をおさえる勘をもつてことばを運ぶ。「大古芸者は当推量も動物的な勘に頼つてゐるのではなく、ちゃんと筋を辿つてつぼを押へてきて」話すのである。ゆきとどいた心から臨機応変の態度が生まれる。くろうとの職業的修練は、荒々しく生の心を表わして相手の心に逆らうことを避ける。しろうとの、誠意を押しつける方法や、自分の信ずる主張を貫くようなやり方でのゆきとどき方は許されない。人の心を柔らげる意味でのゆきとどき方が要求される。一見蓮葉であり安易である。狡さが生まれる。

染香は臨機応変の話題の転換が巧いので、名妓だといわれている。「この世界は何にでも直接云ふより臨へ進らせて云ふ主義らしい。だからたま〜そこに梨花がゐるから『ねえ春さん』で、たぶん梨花のゐなかつた数時間まへまでは猫が代用されて『ねえポッコちゃん』と云はれてゐたのではなからうか」と梨花は考える。主人

は自分の清元の上達を見透かされて驚き、梨花の正体に迫る。梨花はそのとき指を切っていた。「そのせいで指切ったなんて押しつけてくるのいやあね」と主人はいう。清元を看破られたくやしさを「あなたは指の怪我を押しつけてくる」という非難にすりかえる。この転換は梨花には「ずるさ」としか考えられない。「直接文句を云ふやうなことをしない」で、横眼に察して「間接的な云ひかた」で自分の意志を通そうとする。いやみでもある。

同じ精神から、極度に巧い取り繕いが生まれる。見栄よくとりしきるのである。染香は主人の不在中、おひろめの芸妓へ挨拶をする。しかし「主人不在だと云ひっぱなしにはしない」「折角いらしてくださったのにねえ、ほんとにりっぱにできましたこと」と取り繕う。大古芸者の所以である。正妻の社長夫人に見込まれたほどの芸者葛次は、口の利き方を梨花に教えている。「税務署その他諸扱ひ一切には、私来たばかりの女中ですと云へ。よそからこの事件のこと訊きに来たら知らないで通せ。ことに巡查さんに関して訊かれたら、なにぶんにも不断はおさきへ寝かしていたときますから存じませんと云へ」台所口の取り繕い一切である。

取り繕いに気品を持たせ、ゆきとどいた心を感じさせるのはむづかしい。やよもすれば上べの取り繕いが看破され窮した心のずるい正体が見透かされる。染香は「あんまり云ひわけうますぎるんでいめなんだって云ふわ。相済みません、ごめんなさいいってんばりのほうが、云ひわけうますぎるよりまだましなんだって話よ。折角同情して、もあんまりうますぎるんで、こん畜生って気にされちまふって」と帳場さんに評される。むしろ無言の方が、取り繕いに気品を持たせることもある。口利きとは能弁にまくすことばかりではな

い。一流の芸妓には無言の効果も充分考慮されている。主人は饑舌で窮した内情をのぞかれるようなことをしない。水野の女将にふるまわれても、「ご馳走さま」とだけである。「おいしいといふことは時によっては何れしく響くことを承知してゐる」からである。

取り繕いは習慣化し、身につくと連つ葉に流れ気品を失いやすうとの世界に「二タ通りの声」を生む。大仰なもの言ひ方を生む。梨花の正体が明らかでない間は「奥のほうからあどけなく舌つたるく云ひかけ」それが目見えの女中だと知れると「同じその声が糖衣を脱いだ地声になって」いる。梨花は「花柳界はみんな裏表二タ通りに訓練された声をもってゐるんだらうか。な、子さんも主人も二タ通りの声だし、猫も戦闘用絶叫と愛玩物的嬌声がある」と考える。「裏声に怨みっぽく」いうことも媚態である。「けはしく呼びたてられて行ってみると、笑顔がゆつたりと優しい」のも臨機応変で「とっさに気がかほるのか、あゝいふじれったい物云ひにかういふのどかな顔が飾ってあるのか」不思議な取り繕いである。さらに積極的に用いると「気をもたせる」ための技巧が生まれる。な、子は昔の恋人の電話を「おねえさんに話してみてもいい」といって切り、「おねえさんが……って」とかける。「云ひもしないことを云ったにされてゐて主人はなんとも咎めない。」

取り繕った声、ことばを脱いで、押しつめられ激した心をそのまま吐くと、喧嘩は凄じい。もともと匂うような美しい心しかもたずといった過去ではない。白くない沢山の経験が喧嘩のことばを豊富にする。染香は伝票の不正確をなじって主人と口論する。「口でする喧嘩の染香のうまさ、嘲笑し、からかひ、腹をたてさせておい

て、きゅっと捻る。……いつているうちに胆はすわる。「五十年の並々でない起き伏しを凌いできた恐るべき土性骨をあへて隠さず振りたて」相手を倒るのである。

三

くろうとのことばは、話をしむけるうまさ、挨拶の正しき、お座敷の話題の豊富さと洗練ゆきとどいた心を表わし実務的でもあることにおいて、しろうとを超えたものに設定される。

一方技巧的嬌声嬌態、取り繕いの巧さ、豊富な経験からくる喧嘩の巧さは、常識的にもこの社会の特徴と考えられている。そして巧みであればあるだけ、取り繕いを余儀なくされているかなしさを、看破られていると知りつつ取り繕う楽天性を、「生きる」ことへの体当たりのなためらいの無さを、感じさせる。そこに「流れる」世界の哀れがしみじみ漂う。

作者は「流れる」世界、下町の哀れを「姦声」に説く。露伴翁から「水の流れるやうにさらさらしくちやいけぬ」と心をさとされた作者の得た悟りである。「下町の女には貴賤さま／＼に、さら／＼流れるものがある。それは人物の厚さや知識の深さとは全く別なもので、ゆく水の何にとどまる海苔の味といふべき香ばしいものであった。さらりと受けさらりと流す、鋭利な思考と敏活な才知は底深く隠されて、流れをはゞむことは万ない。流れることは澄むことであり、透明には安全感があった。下町女のとどこほりなき心を人が蓮葉とも見、冷酷とも見るのは自由だが、流れ去るを見送るほど哀愁深きはない。」

小説「流れる」のこの哀れは、下町の女たちの流れ去るを見送る哀愁である。下町の女はどこおらぬ心で取り繕い、嬌声を流し、気をもたせ、抗う。「流れる」とは象徴的である。確かに、蓮っ葉に見え冷酷に見えても、そこには安全感がある。こだわらずさらりと流す心の安全感である。強さである。

下町の女の流れるを見送るときの哀愁は、小説「流れる」の大きな魅力である。

(香川県立丸亀高等学校教諭)